



分科会 14 セルフメディケーションへの貢献 —新制度施行1年を経過して—

W-14-03

セルフメディケーションのあり方と薬剤師への期待 (未病ファーマシストとしての挑戦への期待)

ふくお よしひろ
福生 吉裕

(財)博慈会老人病研究所 所長 (日本医科大学 連携教授)
(日本未病システム学会 常任理事)

(はじめに)

特定健診・特定保健指導が2008年に制度として実施されてきて2年が経った。これによりメタボリックシンドロームの防止としては期待できるが、この制度により“管理されるセルフメディケーション”化が進み、本来の“自己啓発タイプ”のセルフメディケーションは少なくなってきた感じがする。これは一旦異常が発症した場合、自分で状況を把握し適切に対応するかの能力低下を招くのではないかと懸念されるのである。

一方、2009年には改正薬剤師法が施行され大衆薬が一類、二類、三類と分けられた。これにより生活者の感覚としては健康と病気との二極化がより進んだようである。かえってセルフメディケーションの気概が風化してきているのが現状である。本来、セルフメディケーションのナビゲーターとしては薬局・薬剤師が最もふさわしい。今回、その貢献への薬局・薬剤師のあり方に期待を込めて述べてみたい。

I) セルフメディケーションの現状

1) 医療現場に見る、絶滅危惧種化するセルフメディケーション。

核家族化が進み、年長者との接触が減ったためか、身近な身体の状態を把握し簡単な対応すらできないケースが多くなってきている。適切な健康医療情報を提供したり相談出来るかかりつけ薬局が少なくなっている可能性がある。この要因を生活者側、社会環境側からみると。

- ・生活者側の変化：核家族化、独居老人・都市での非家族独身の増加、専門分野への依存性の高まり。
- ・社会環境の変化：改正薬剤師法の影響。大型販売店の進出、かかりつけ薬局の減少、テレビなど医療メディア情報の氾濫

などがあげられる。がこの中でもかかりつけ薬局におけるセルフメディケーションの分野はまだ再考されるべき部分が残っている。

2) 分かりやすいセルフメディケーション、分かりにくいセルフメディケーション

セルフメディケーションを行う主役はあくまでも生活者には変わりはない。しかし生活者がどこまでをどのように行うのか、セルフメディケーションの適応と限界が難しい。そこで分かりやすいセルフメディケーションを提供するのに「未病」の概念がある。日本未病システム学会では未病を健康と病気の間としており、セルフメディケーションを行う人は未病の人々であり6000万人以上いるとされる。この未病の人のセルフメディケーションを指導するのがこれからの薬剤師(未病ファーマシスト)の大きな仕事ではないかと思われる。病気の人への薬の調剤だけではセルフメディケーションの指導は難しい。薬剤師は未病を理解しておくことのセルフメディケーションの指導がよりスムーズになされやすい。

3) 薬局はセルフメディケーションの実践の場

薬局とセルフメディケーションの関係と言えば、薬局はセルフメディケーションをする人がOTCを買いに来るところではない。積極的にセルフメディケーションに介入し実践していく場が薬局であり、セルフメディケーションを指導するのが薬剤師である事を再認識してもらいたい。薬剤師もセルフメディケーションを勧めるには薬剤師自らがセルフメディケーションを行う必要がある。

4) 薬剤師におけるセルフメディケーションとは

薬局には自覚症状の殆どない者から、自覚症状の訴えの強い者まで幅広く訪れる。自信を持って仕分けをすることである。仕分けとは、どこまでがセルフメディケーションで出来、どこ以上は病院へいくかの限界点を薬剤師が知っておくことである。説得力と臨床医学的知識をバックボーンとして持っている事が必要である。「ここまではOTC薬で充分カバー出来ますよ。こんな症状になればクリニックを紹介しますよ」と言った臨床医学的知識を駆使することがこれからの薬剤師にとって大事である。

II) セルフメディケーションを推進しやすくする未病ファーマシー

1) 大事なのはセルフメディケーションの限界を知っておくこと。すなわちOTC薬より処方薬への切り替え時期である。これを知っておくことが患者の信頼を得る元になる。

2) 臨床に強くなる薬剤師のコツ

セルフメディケーションを勧める薬剤師にとって臨床医学的知識の集積は重要である。それにはクリニックを活用すると実践的に上達しやすい。薬局側から積極的に紹介状を発行し、患者を紹介することである。紹介患者は殆ど処方箋(解答)をもって薬局に戻ってくる。こうすることで患者を介して臨床的経験の積み重ねが出来、地域密着型の薬局へ足がかりが出来、セルフメディケーションに強い薬剤師となる。

(おわりに)

7月11日 東京において日本未病システム学会の薬剤師部会で未病ファーマシストの養成についてのシンポジウムが開催された。少子高齢時代における国民皆保険制度の維持の為に医薬人として何をなすべきか、誰がおこなうのかのシンポジウムであった。未病の指導を行う薬剤師に熱い期待が寄せられたので若干報告したい。